

(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 特 許 公 報 (B1)

(11) 特許番号

特許第6432013号
(P6432013)

(45) 発行日 平成30年11月28日 (2018.11.28)

(24) 登録日 平成30年11月9日 (2018.11.9)

(51) Int.Cl. F 1
A 4 5 D 19/18 (2006.01) A 4 5 D 19/18

請求項の数 8 (全 24 頁)

(21) 出願番号	特願2018-95914 (P2018-95914)	(73) 特許権者	516202165
(22) 出願日	平成30年5月18日 (2018.5.18)		李 美和
審査請求日	平成30年5月25日 (2018.5.25)		京都府京都市左京区聖護院山王町 1 8 番地
早期審査対象出願			メタボ岡崎 8 0 7 号
		(72) 発明者	相根 志郎
			京都府京都市左京区岩倉南三宅町 7 2 番地
		(72) 発明者	李 美和
			京都府京都市左京区聖護院山王町 1 8 番地
			メタボ岡崎 8 0 7 号
		審査官	石井 茂
		(56) 参考文献	特開 2 0 1 2 - 1 7 9 3 5 1 (J P , A)
			最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 カバーとその使用方法

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項 1】

手で引っ張れば薄くなりながら伸びて、元のサイズには戻らない薄さの合成樹脂製シートで形成されたカバーであって、該カバーの長手方向に沿うセンターライン上には、被装着者の頭部が辛うじて通る大きさの貫通孔が形成され、該貫通孔に被装着者の頭部を通して被ると、被装着者の少なくとも両肩と腹部とが被われる大きさのカバーとなり、その状態の後側のカバー部分をそのままに、腹部へ垂れる前側のカバー部分を持ち上げて、前記貫通孔から被装着者の顔を露出させると、前記貫通孔の周縁が顔で押し広げられ、引き伸ばされてより薄くなりながらさらに伸びて、被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りの肌に密着する貫通孔となり、さらに腹部から持ち上げて頭部に被せた前記カバー部分が、頭髮全体を被う大きさとなるカバー。

【請求項 2】

請求項 1 に記載のカバーの使用方法であって、前記カバーの貫通孔に被装着者の頭部を通して、被装着者の少なくとも両肩と腹部とを前記カバーでもって被い、その状態で被装着者の頭髮に薬剤を施した後、腹部に垂らした前側のカバー部分を持ち上げて、前記貫通孔から被装着者の顔を露出させることにより、前記貫通孔の周縁を被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着させ、次に腹部から持ち上げて頭部に被せた前側のカバー部分と、両肩に掛かる後側のカバー部分とで、頭髮全体を包み込むことを特徴とするカバーの使用方法。

【請求項 3】

10

20

請求項 1 に記載のカバーにおいて、被装着者の腹部と背中とに分かれて垂れる一方のカバー部分が、上部が開いた袋部に形成され、前記袋部は、前記貫通孔の周縁が、被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着した状態において、頭髮全体を包み込むことができる大きさであることを特徴とするカバー。

【請求項 4】

請求項 3 に記載のカバーにおいて、前記袋部と前記垂れ部との境目である、被装着者の肩の稜線部分に沿って、該カバーの側縁から前記貫通孔に達しないまでの切り込みが設けられていることを特徴とするカバー。

【請求項 5】

請求項 3 又は 4 に記載のカバーの使用方法であって、被装着者の頭髮に薬剤を施す前に前記袋部の上部開口を上に向けた状態で前記貫通孔に頭部を通し、続いて前記袋部と前記垂れ部の何れか一方を被装着者の腹部へ垂らし、他方を被装着者の背中に垂らして、被装着者の上半身を被うことを特徴とするカバーの使用方法。

10

【請求項 6】

請求項 5 に記載のカバーの使用方法に続いて、被装着者の頭髮に薬剤を施し、続いて腹部に垂らした前記袋部又は前記垂れ部を前方へ持ち上げながら前記貫通孔から被装着者の顔を露出させて、前記貫通孔の周縁を被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着させ、続いて頭部に持ち上げた前記袋部と前記垂れ部とで、頭髮との間に空気を含ませた状態で頭髮全体を包み込むことを特徴とするカバーの使用方法。

【請求項 7】

20

請求項 5 に記載のカバーの使用方法に続いて、被装着者の頭髮に薬剤を施し、続いて腹部に垂らした前記垂れ部を前方へ持ち上げながら前記貫通孔から被装着者の顔を露出させて前記貫通孔の周縁を被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着させ、続いて腹部から持ち上げた前記垂れ部をくしゃくしゃにして頭部に被せ、その上に、背中から持ち上げた前記袋部を被せて、頭髮との間に空気を含ませた状態で頭髮全体を包み込むことを特徴とするカバーの使用方法。

【請求項 8】

請求項 5 に記載のカバーの使用方法に続いて、被装着者の頭髮に薬剤を施し、続いて腹部に垂らした前記袋部を前方へ持ち上げながら前記貫通孔から被装着者の顔を露出させて前記貫通孔の周縁を被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着させ、続いて背中から持ち上げた前記垂れ部をくしゃくしゃにして頭部に被せ、その上に、腹部から持ち上げた前記袋部を被せて、頭髮との間に空気を含ませた状態で頭髮全体を包み込むことを特徴とするカバーの使用方法。

30

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、頭髮に薬剤を施すときは、上半身を被うケープとなり、薬剤を施した後は、頭髮全体を保温・保湿して、薬剤の乾燥を防ぐことができる新たなカバーとその使用方法に関する。

【背景技術】

40

【0002】

美容室や理容室において、パーマやヘアトリートメント、ヘアカラー等の薬剤を施すときは、薬剤が施された頭髮にヘアキャップを被せたり、食品包装用のラップフィルムを巻いたりする。これは、薬剤の乾燥を防ぎ、頭髮を保温・保湿することによって、薬剤の浸透効果を促進させるためである。

【0003】

しかし、個人が自宅で髪を染める時は、ヘアキャップやラップフィルムは、殆ど使用されない。そのため、髪に塗布した薬剤が乾燥し、十分な保温・保湿が行われないうちに、ヘアカラー剤の場合は、化学変化にムラが生じて、染ムラ、色ムラが生じることがある。また、薬剤塗布後の放置時間中に、ヘアカラー剤で周囲を汚す危険性がある。さらにヘア

50

カラー剤の独特な刺激臭によって不快感を覚えることもある。

【0004】

また、ヘアカラー剤を使用するときは、衣服への付着を避けるために、ケープを着用するが、その場合でも、薬剤の付着した頭髮が露出しているため、薬剤によって衣服や周囲を汚す危険性もある。それを嫌う場合は、風呂場でヘアカラー剤を使用するが、それが身体に付着すると、肌が数日間染まることがあり、さらに浴槽や壁等に付着すれば、その汚れが落ちない問題がある。

【0005】

こうした背景から、下記先行技術文献に開示した種々のヘアキャップが開発されているが、それらは家庭でも美容室等でも定着しておらず、実用化されたものは、殆どない。

10

【0006】

一方、美容室や理容室でヘアキャップを使用するときは、ゴム紐の入ったヘアキャップを大きく広げて、薬剤の付着した頭髮に被せなければならないから、美容師にとっては至難な作業となる。特に、ヘアキャップの周縁にヘアカラー剤が付着すると、それがお客様の肌に接して染まることがあるため、ヘアキャップの周縁が頭髮に接触しないように、ヘアキャップのゴム紐を両手で目一杯広げて被せなければならないが、一人でそれを行うことは極めて難しく、時には他者の助けが必要になる。しかも、ヘアキャップを頭の上から被せるために、被せる時に、全ての頭髮をヘアキャップ内に納めた状態にすることが難しく、しばしばヘアキャップを被せた後に、周縁からはみ出た髪をヘアキャップ内に納めなければならない煩わしさを伴うことがある。

20

【0007】

また、被せたヘアキャップを取り除くときに、ゴム紐の伸縮により、ヘアキャップに付着した薬剤が弾かれて飛散し、お客様の顔周りや衣服に付着することがある。さらに、ヘアキャップのギャザーを閉じるゴム紐が肌に強く食い込むため、お客様に不快な思いをさせたり、痕を残したりする。そうした事情から、最近では、食品包装用のラップフィルムで頭髮を被うことが行われているが、この場合にも、次のような問題が指摘されている。

【0008】

ラップフィルムは、ラップフィルム同士の粘着力を利用して頭髮に巻かれるため、巻かれたラップフィルムは、頭髮を包み込んで薬剤の乾燥を防ぐが、断熱性能が劣るため、室内の冷暖房機器からの冷風や温風に晒されると、密着した部分が部分的に冷やされたり暖められたりして、薬剤の効きがムラになることがある。そのため、ラップフィルムを被せた上から遠赤外線を照射したり、その上から遠赤外線キャップを被せたりしている。

30

【0009】

また、ラップフィルムには、自己粘着力があるため、フィルムロールから引き出されたラップフィルムの四隅を保持していないと、折れ重なって使用できなくなることがある。そのため、ラップフィルムを張った状態で頭部に巻き付けるときに、生え際から髪が垂れていると、それを掻き上げながら巻きつけることが一人でできないために、他者の助けが必要となる。さらにラップフィルムを頭部に巻き付けるときは、ヘアキャップと同様、髪の生え際部分を強く締め付けて、ラップフィルムがずれたり、薬剤が顔に垂れたりしないようにしなければならないが、密着させた隙間に薬剤の化学反応で生じた水や薬剤が侵入すると、フィルムの自己粘着力が失われて緩み、それに起因して、付着した薬剤の重みも加わってラップフィルムが頭部からずれ落ちることがある。

40

【0010】

また、美容室では、薬剤の浸透効果を確認するために、頭髮に巻かれたラップフィルムを部分的に開いて頭髮を露出させることがある。そのときも、フィルムの自己粘着力が失われて、頭部からずれ落ちることがある。それが予期せぬときに起きると、お客様や周囲に薬剤が飛散して、思わぬ事故を招くことがある。また、シャンプー台でラップフィルムを取り除く時も、同様な注意を必要とする。

【先行技術文献】

【特許文献】

50

【0011】

【特許文献1】特開2001-314224号公報

【特許文献2】特開2002-320516号公報

【特許文献3】特開2003-093136号公報

【特許文献4】特開2003-070525号公報

【特許文献5】特開2003-189924号公報

【特許文献6】特開2005-194678号公報

【特許文献7】特開2006-255266号公報

【特許文献8】特開2009-007692号公報

【特許文献9】特開2013-162897号公報

10

【特許文献10】特開2016-028667号公報

【特許文献11】実開昭49-66636号のマイクロフィルム

【特許文献12】実開平1-149718号のマイクロフィルム

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0012】

本発明は、こうした問題を一挙に解決したもので、ヘアカラー剤やトリートメント剤等の薬剤を施すときは、ケープとなり、薬剤を施した後は、薬剤の付着した頭髮を簡単に包み込むことができる新たなカバーと、その使用方法を提供することを課題とする。

【課題を解決するための手段】

20

【0013】

以下、本発明に係るカバーの構成とその使用方法を、図面及び図面代用写真（以下、図と略称する）に基づいて説明する。

<カバーの基本形態1>

本発明に係るカバーは、手で引っ張れば伸びる薄さの合成樹脂製シートで形成され、該カバーの長手方向に沿うセンターライン上には、被装着者の頭部が辛うじて通る大きさの貫通孔が形成され、該貫通孔に被装着者の頭部を通して被ると、被装着者の少なくとも両肩と腹部とが被われる大きさのカバーとなり、その状態の両肩を被う後側のカバー部分をそのままにして、腹部へ垂れる前側のカバー部分を持ち上げて前記貫通孔から被装着者の顔を露出させると、前記貫通孔の周縁がさらに伸びて被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着する貫通孔となり、さらに腹部から持ち上げて頭髮に被せた前記カバー部分が、頭髮全体を包み込むことができる大きさであることを特徴とする。

30

【0014】

このカバーは、手で引っ張れば伸びる薄さの合成樹脂製シートで形成されている。具体的には、ポリ袋等に使用されるポリエチレン、ポリプロピレン、ナイロン等を素材とした非吸水性のシートである。このポリ袋を素材としたシートは、手で引っ張れば、5倍以上は伸びるが、カバーに形成した貫通孔に頭部を通し、その貫通孔から顔を露出させるためには、0.05mm以下の薄さのシートが好ましい。また、引っ張って伸びた貫通孔は、薄くなって肌に密着するが、そのときの密着性と締め付け力を考慮すると、例えば0.03mmから0.015mmの薄さのシートが好ましい。

40

【0015】

このシートで形成したカバーに、汚れ防止用のケープとしての機能を持たせる場合は、少なくとも被装着者の腹部と背中を被う大きさにする。具体的には、図1に示すように、横幅L1を50～90cm、縦幅L2を70～100cmの略四角形にし、貫通孔2は、カバー1の長手方向に沿うセンターラインCLの略中央部分に設けておく。

【0016】

また、汚れ防止専用のケープを装着した上からカバーを装着する場合は、エプロンのように被装着者の両肩と腹部を被う大きさのカバーとしても良い。この場合は、図2に示すように、横幅L1が約50cm、縦幅L2が約70cmの大きさであれば足りる。また、貫通孔2は、センターラインCL上の一端寄りに形成しておく。このときのカバー1の外

50

縁と貫通孔 2 の周縁までの最短距離 M L は、貫通孔 2 が引き伸ばされても破れない程度の長さ、例えば 7 ～ 1 0 c m 程で良い。

【 0 0 1 7 】

また、図 3 に示すように、被装着者の前側に垂らすカバー 1 の長さ L L を 9 0 ～ 1 0 0 c m に伸ばしておけば、カバー 1 を装着したときの裾 1 a を、図 4 に示すように、テーブル T 上に敷き、その上に鏡 M や薬剤 N 等を並べて、髪染めを行うこともできる。

【 0 0 1 8 】

これらのカバー 1 に設ける貫通孔 2 の大きさは、被装着者の頭部が辛うじて通る大きさである。例えばポリ袋を素材としたカバー 1 では、引っ張れば 5 倍以上は伸びるから、例えば周囲長が 5 3 c m の頭部に対し、貫通孔 2 の周囲長を略 3 8 c m としておく。そうすれば、小さな貫通孔 2 に頭部を通すときに、貫通孔 2 が広がって首に嵌るが、元のサイズには戻らない。この例では、薄さが 0 . 0 2 m m のポリ袋で試したが、カバー 1 の厚みが厚くなれば、貫通孔 2 の大きさを大きくする必要がある。例えばカバー 1 を 0 . 0 4 m m のポリ袋でカバー 1 を形成した場合は、前述の貫通孔 2 の周囲長を略 4 0 c m に広げておけば、0 . 0 3 m m の薄さと略同程度の抵抗でもって、小さな貫通孔 2 に頭部を通すことができる。

【 0 0 1 9 】

図 1 のカバー 1 を装着するときは、貫通孔 2 に頭部を入れて被った後、そのカバー 1 のセンターライン C L を被装着者の前後方向に向ける。すると、図 5 に示すように、カバー 1 でもって被装着者の両腕を除く上半身を被うことができる。これにより、カバー 1 が頭髮に薬剤を施すときの汚れ防止用ケープになる。また、図 3 の長いカバー 1 を装着するときは、前述のように、貫通孔 2 に頭部を通した後、丈の長いカバー部分を腹部へ垂らし、その裾 1 a を、図 4 のように、テーブル T 上に敷く。これにより、テーブル T 上に薬剤等が零れても、ケープとして装着した裾 1 a をテーブル T の汚れ防止用シートとして機能させることができる。また、図 2 の短いカバー 1 を装着するときは、専用のケープを装着した上から図 2 のカバー 1 を装着する。

【 0 0 2 0 】

このようにカバー 1 を装着してから、頭髮に薬剤を施し、続いて図 6、図 7 に示すように、後側のカバー部分は、そのままにして、腹部へ垂れる前側のカバー部分だけを持ち上げて貫通孔 2 から被装着者の顔を露出させる。すると、貫通孔 2 の周縁は、さらに伸びて図 8 に示すように、被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着する。

【 0 0 2 1 】

このとき、腹部へ垂れる前側のカバー部分だけを持ち上げて顔を露出させるため、図 9 に示すように、貫通孔 2 のうなじ側は、伸びながら束になり、貫通孔 2 の前側は、顔で押し広げられて、図 8 のように、平面的に広がった状態で顔周りの肌に密着する。このときの貫通孔 2 の締め付け力は、不快感を覚えるような強いものではなく、それが伸びて薄くなったことにより、適度な強さと幅とでもって肌に密着する。そのため、薬剤の化学反応によって生じた水が薬剤と混ざって垂れてきても、肌に密着した貫通孔 2 の周縁がそれを阻止するから、薬剤の混じった水分が顔やうなじに垂れることはない。

【 0 0 2 2 】

これに対し、従来のヘアキャップは、髪の毛の生え際に沿う縁部にゴム紐の入ったギャザーが設けられ、そのギャザーをゴム紐の締め付け力によって髪の毛の生え際に押し付けているから、ギャザーの隙間から薬剤等が漏れ出ないようにするには、不快感を覚えるような強い締め付け力でもってギャザーを締め付ける必要がある。これに対し、本発明では、手で引っ張れば伸びる薄さの合成樹脂製シートで形成された貫通孔 2 が、顔で押し広げられることによって顔周りに密着するから、ヘアキャップのような不快感が無く、貫通孔 2 周縁からは、薬剤の混じった水分は、漏出しないのである。

【 0 0 2 3 】

貫通孔 2 の形状は、頭部を輪切りにしたような形状が好ましいが、貫通孔 2 の周縁は、柔軟に伸びるから、例えば円形や卵形であってもよいし、伸びたときの貫通孔 2 の最終形

10

20

30

40

50

状である、図9に示すような、被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに沿った形状の相似形の小さな形状であっても良い。

【0024】

また、量産化に備えて、図10に示すように、所定幅だけ直線状に切り裂いて、その両端部に小さな丸孔2aを開けた貫通孔2であっても良い。この小さな孔2aは、直線状に切り裂いた貫通孔2を頭部に通すときに、その両端部が裂けるのを防止する孔である。また、図11の符号2bで示すように、略中央部分の貫通孔2から幅の短い横幅の側縁2cへ向けて切断し、その切断部分2bを部分的に重ねて粘着テープ等で繋ぎ合わせることで、貫通孔2の周囲長が自在に調整できるようにしても良い。この形態のカバー1をケープとして装着するときは、この切断部分2bを開いて、貫通孔2の周縁を首に巻いて閉じる。閉じた切断部分2bは、伸びる粘着テープや接着剤等で繋ぎ合わせておけば、その切断部分2bは、被装着者の肩の稜線に沿うから、図6、図7のように、カバー1の前側を持ち上げて貫通孔2から顔を露出させた場合は、閉じた切断部分2bが耳の上に被さるから、その切断部分2bから薬剤の化学反応で生じた水分等が漏出することはない。

【0025】

<基本形態1のカバーの使用法の説明>

これらのカバー1を使用するときは、まず、カバー1の貫通孔2に被装着者の頭部を通し、続いて図5に示すように、そのカバー1でもって被装着者の少なくとも両肩と腹部とを被い、その状態で被装着者の頭髪に薬剤を施す。続いて腹部に垂れる前側のカバー部分を持ち上げて貫通孔から被装着者の顔を露出させることにより、前記貫通孔の周縁を被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着させ、次に腹部から持ち上げて頭髪に被せた前側の前記カバー部分と、両肩に掛かる後側のカバー部分とで、頭髪全体を包み込むことを特徴とする。

【0026】

具体的に説明すると、図1や図3の長いカバー1を使用する場合は、まず、カバー1を広げて貫通孔2に頭部を通し、丈の長いカバー部分で被装着者の腹部が被われるようにカバー1の向きを整える。図2の短いカバー1の場合は、専用のケープを装着した上から短いカバー1を腹部へ垂らして装着する。この状態で頭髪にヘアカラー剤やトリートメント剤を施す。このとき、被装着者の両肩は、裃の肩衣のように広く開放されているから、一人で行う場合でも、被装着者は、両腕を自由に上げて、頭髪に薬剤を施すことができる。

【0027】

薬剤の塗布が終了すると、腹部に垂れるカバー1（以下、この部分を前側のカバー部分という。）を前方へ持ち上げながら貫通孔2から顔を露出させる。このとき、図6、図7に示すように、貫通孔2の後側周縁をうなじに沿わせ、前側のカバー部分を前方へ引き上げながら、顔で貫通孔2を押し広げるようにして顔を露出させる。すると、うなじに沿う貫通孔2の周縁が支点となり、そこから貫通孔2の周縁が伸びて、それが図8、図9に示すように、被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着する。このときの貫通孔2の締め付け力は、不快感を覚えるような強いものではなく、適度な強さと幅とでもって顔周りに密着する。続いて、図9に示すように、腹部から持ち上げて頭髪に被せた前側のカバー部分と後側から持ち上げたカバー部分とを頭部で束ね、束ねた部分を、図12に示すように、クリップ等で止めて、頭髪全体を包み込む。

【0028】

図2の短いカバー1の場合は、後述の図25や図34のカバー1と併用して使用する場合と、単独で使用する場合とがある。単独で使用する場合は、貫通孔2の端から裾1aまでの長さL_Lを60cm程度にし、横幅L₁は90cmから1m程度にし、後側のカバー部分の長さM_Lは、10cmから30cmあれば良い。包み方は、前側のカバー部分を持ち上げて貫通孔2から顔を露出させた後、両肩に掛かっていたカバー部分を頭頂部へ持ち上げてくしゃくしゃにすると、自然に後側のカバー部分もうなじから後頭部を被うようになる。その上から、前側のカバー部分を被せる。そして、後ろに垂れる前側のカバー部分の裾1aの両端をうなじから額に回して結ぶ。こうすると、図2の短いカバー1でも、空

気を含ませながら頭髮全体を包み込むことができる。また、図4のようにテーブルTを被う機能を持たせたいときは、図3のように貫通孔2から裾までの長さLLを1m程度に延ばせば良い。このときの包み方は、前述と同様であるが、前側のカバー部分1aを中表に折って二重にした状態で、貫通孔2から顔を露出させ、その後は、前述と同様に、二重にした前側のカバー部分を頭部に被せて、後側のカバー部分の両端1bを額に回して結ぶ。すると、より多く空気が含まれて、保温・保湿性能を高めることができる。

【0029】

また、図3の裾1aの長いカバー1でテーブルTを被ったときは、テーブルTに敷いた裾1aを持ち上げ、中表に折って胸元のカバー部分に重ねても良い。そうすれば、テーブルTに敷いたカバー1が薬剤等で汚れていても、それを胸元で重ねることにより、胸元のカバー部分とカバーの裾1aとの間に薬剤等の汚れを閉じ込めることができる。そして、前述同様、腹部に垂れる前側のカバー部分を持ち上げて貫通孔2から顔を露出させた後、それをくしゃくしゃにして頭部に被せる。続いて、背中から持ち上げた後側のカバー部分をその上に被せて、上下に重なった前後のカバー部分の周縁を閉じれば、頭髮全体をふんわりと包み込むことができる。また、これに代えて、前述のように、図9に示すように、包み込むこともできる。

【0030】

頭髮を包み込むときに、カバー1と薬剤の付着した頭髮との間に空気を含ませると、カバー1内を保温・保湿して、薬剤の浸透効果を促進することができる。例えば図1、図3のカバー1の場合は、腹部から持ち上げた前側のカバー部分を頭頂部でくしゃくしゃに束ねてから、その上に後側のカバー部分を被せれば、くしゃくしゃにした部分に空気が含まれ、さらにその上に被せたカバー部分との間にも空気が含まれるから、カバー内の空気が外気からの影響を遮断して、頭皮からの熱によってカバー1内が保温・保湿される。加えて、カバー1内で空気の循環が起き、これによって毛髪温度が均一化され、その結果、薬剤の浸透効果が均一になるとともに、薬剤の乾燥も防止される。また、頭髮がカバー1によって密閉に近い状態で被われるから、薬剤の刺激臭を封じ込めることができる。

【0031】

こうして頭髮全体を包み込めば、貫通孔2の周縁が顔周りに密着し、前後のカバー部分は、裏返しにされて、薬剤等が付着していないために、前開きでない服、例えばTシャツを脱ぐときに、シャツの衿がカバー1に触れても薬剤がシャツに付着することはないし、脱ぐシャツと一緒にカバー1が外れることもない。したがって、家庭で髪を染めるときに前開きの服に着替えるのを忘れていても、慌てることなくTシャツを脱ぐことができる。

【0032】

以上の包み方は、髪を肩下まで垂らさない髪型での包み方であるが、髪を肩から垂らしたままの場合は、垂れた髪を被うことのできる少し長めのカバー1を使用する。そして、図13に示すように、背中に垂れる後側のカバー部分と、腹部から持ち上げて背中に垂らした前側のカバー部分とで、背中に垂らした頭髮を挟み込むようにする。続いて図14に示すように、例えば重なった前後のカバー部分の両サイドを中央に折り重ねた後、垂れ下がったカバー1の下端部を持ち上げて、図15に示すように頭で束ね、束ねた部分をクリップ等で止める。または、背中に垂れ下がるカバー1の下端部を、図16に示すように、頭部まで持ち上げて被り、その左右両端部を、図17に示すように顎下で結ぶ。或いは、背中に垂れ下がるカバー1の下端部を肩まで持ち上げて、図18に示すように、肩掛けのように肩に被せて、両端を喉元で結んでも良い。こうすれば、背中に垂れる頭髮をカバー1内に閉じ込めることができる。

【0033】

<カバーの基本形態2>

次に示すカバーは、基本形態1のカバーにおいて、被装着者の腹部と背中とに分かれて垂れる一方のカバー部分が、上部が開口した袋部に形成され、該袋部は、前記貫通孔の周縁が、被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着した状態において、頭髮全体を包み込むことができる大きさであることを特徴とする。

【0034】

具体的には、このカバー1は、図19、図20に示すように、カバー1に形成された貫通孔2に頭部を通して被ると、被装着者の背中と腹部とに分かれて垂れ下がる、上部に開口部3aを備えた一方の袋部3（図20参照）と、他方の垂れ部4（図19参照）とを備えている。この袋部3と垂れ部4は、図19、図20に示すように、少なくとも被装着者の両肩と腹部とを被う大きさに形成されている。そして、前述と同様に、貫通孔2に頭部を通した後、被装着者の腹部に垂らした垂れ部4又は袋部3を持ち上げて、図21に示すように、貫通孔2から被装着者の顔を露出させると、図22、図23に示すように、貫通孔2の周縁がうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着する。この状態から、背中に垂らした袋部3又は垂れ部4を持ち上げて、袋部3を垂れ部4の上に被せれば、図24

10

【0035】

この形態のカバー1は、扁平にすると、図25に示すように、袋部3が三角形の袋になり、その底辺に開口部3aが形成され、その開口部3aの縁から垂れ部4が続き、その袋部3と垂れ部4の境目中央部分に貫通孔2が形成されている。この図25のカバー1は、袋部3と垂れ部4を略同じ長さに設定しているが、垂れ部4は、袋部3より短くても長くても良い。また、扁平状態の袋部3は、略三角形になるが、先端をカットした台形でも良いし、四角形でも良い。このカバー1においても、貫通孔2は、被装着者の頭部が辛うじて入る大きさに形成されている。

20

【0036】

＜基本形態2に係るカバーの使用方法的発明＞

この形態のカバーを使用するときは、被装着者の頭髪に薬剤を施す前に、前記袋部3の開口部3aを上に向けた状態で貫通孔2に頭部を通し、続いて袋部3と垂れ部4の何れか一方を被装着者の腹部へ垂らし、他方を被装着者の背中に垂らして、被装着者の上半身を被うことを特徴とする。

【0037】

具体的には、図19、図20に示すように、袋部3の開口部3aを上に向けた状態で貫通孔2に頭部を通して被り、袋部3を背中に、垂れ部4を腹部に配置する。ただし、その逆の配置でも構わない。何れの配置でも、被装着者の前後に垂らされた袋部3と垂れ部4は、少なくとも被装着者の両肩と腹部を被う大きさであれば良い。したがって、垂れ部4の丈が短いカバー1を使用する場合は、カバー1の下に専用のケープを装着すると良い。

30

【0038】

続いて頭髪に薬剤を施すが、そのときは、前屈みになって薬剤を施す時に、袋部3を腹部へ垂らしておけば、頭髪から垂れる薬剤を受け止めることができる。また、ロングヘアーの場合は、袋部3を背中に垂らし、その中にロングヘアーを納めて薬剤を塗布することができる。ただし、貫通孔2に被装着者の首が嵌った状態では、貫通孔2を中心にしてカバー1を自在に回動させることができるから、袋部3を腹部に配置するか、背中に配置するかは、被装着者の好みに応じて適宜に変えれば良い。さらに、被ると逆三角錐になる袋部3は、後述するように、頭髪に被せた垂れ部4の上から袋部3を被せる。あるいは、背中に垂らしたままでも、垂れ部4と共に頭髪全体を被うことができるから、前述の基本形態1のカバー1よりは、楽に頭髪を包み込むことができる。さらに、頭部に被せた、または、背中に垂らした袋部3は、三角帽子のように、頂点部分に空気溜りができるから、保温性に優れたカバー1となる。

40

【0039】

続いて薬剤を施した後、腹部に垂らした袋部3又は垂れ部4を前方へ持ち上げながら貫通孔2から被装着者の顔を露出させて、貫通孔2の周縁を被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着させ、続いて頭部に持ち上げた袋部3と垂れ部4とで、頭髪との間に空気を含ませた状態で頭髪全体を包み込むことを特徴とする。

50

【0040】

具体的には、カバー1自身で、あるいは汚れ防止専用のケープの上にカバー1を重ねた状態で、頭髮にヘアカラー剤やトリートメント剤を施すが、それが終了すると、図21のように、腹部に垂れる垂れ部4を持ち上げて貫通孔2から顔を露出させる。また、逆の配置状態では、腹部の袋部3を持ち上げて貫通孔2から顔を露出させる。すると、図22、図23に示すように、貫通孔2の周縁が被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着する。このときの貫通孔2の締め付け力は、不快感を覚えるような強いものではなく、適度な強さと幅とでもって顔周りに密着することは、前述の通りである。なお、図22、図23は、腹部に垂らした垂れ部4を頭部に被せた状態である。

【0041】

10

続いて、腹部から持ち上げた垂れ部4を頭頂部でくしゃくしゃにして頭部に被せ、その上から図23、図24に示すように、背中から持ち上げた袋部3を被せる。逆の場合は、図26、図27に示すように、背中から持ち上げた垂れ部4をくしゃくしゃにして頭部に被せ、その上から腹部から持ち上げた袋部3を被せる。このようにして、垂れ部4をくしゃくしゃにして頭部に被せた上に袋部3を被せて頭髮全体をふんわりと包み込むのがポイントである。これにより、くしゃくしゃにした垂れ部4の間だけでなく、垂れ部4とその上に被せる袋部3との間にも空気を含ませることができるから、カバー1内は、前述のように、保温・保湿されて薬剤の浸透効果を促進することができる。

【0042】

20

また、くしゃくしゃにした垂れ部4の上に袋部3を被せる代わりに、次のような方法によって、カバー1内に空気を含ませることができる。例えば図25に示すカバー1は、袋部3を背中に配置して、貫通孔2から顔を露出させると、図28に示すように、舟底に設けた貫通孔2から頭部Hを突き出したような状態になるから、前垂れ部4の縁と図28の左右に分かれたカバー1の上縁部分Eを重ね合わせて閉じ、閉じたその上縁部分Eを捻じってカバー1内に膨らみを持たせれば、図29のように、カバー1内に空気を含ませることができる。そして、捻じった先端部を、図30に示すようにクリップF等で止めると、カバー1内に空気を含ませた状態で薬剤の付着した頭髮全体をふんわりと包み込むことができる。

【0043】

30

また、図30では、捻じった先端部を、クリップFで止めているが、そのクリップFに代えて、図31に示すように、垂れ部4の腹部と接する裏側、すなわち、垂れ部4を頭部に持ち上げたときに表側となる面にループ状の止め部8を形成しておき、その止め部8に指先で摘んだ図29の先端部を挿入して止めれば、止め部8から引き出された先端部が抜け難くなって、図30のクリップFの代わりとすることができる。この止め部8は、ケープとして使用するときの垂れ部4の裏側に、ループを形成するトンネル状のバンドとして取り付けられている。なお、止め部8の位置や大きさ、ループの方向は、図31に示した位置や方向には限定されない。

【0044】

40

また、図31に示す垂れ部4の裾1aを長くして、図4に示すように、その垂れ部4の裾1aをテーブルT上に敷く場合は、テーブルTに敷いた垂れ部4の裾1aを持ち上げて胸元の垂れ部4の上に重ねる、または、そのままの状態、図21に示すように、垂れ部4を持ち上げて貫通孔2から顔を露出させ、それをくしゃくしゃにして頭部に被せてからその上に背中の袋部3を持ち上げて被せれば、図24のように、頭髮全体をふんわりと包み込むことができる。この場合のくしゃくしゃにされた垂れ部4は、略2倍の大きさに膨らむから、その上に袋部3を被せれば、カバー1と頭髮との間には、より分厚い空気層が形成されて、保温・保湿効果を更に高めることができる。

【0045】

また、前述のように、家庭で使用するヘアカラー剤の場合は、プロの施術時のように、キャップやラップフィルムを使用しなくても、染まるように作られたものが多いため、図32に示すように、腹部から持ち上げた袋部3を頭部に被せた後、図33に示すように、

50

肩に掛かる左右の両端部 3 d を顎下で結んだだけでも、刺激臭をカバー 1 内に閉じ込めて保温・保湿することができる。この場合、貫通孔 2 の周縁は、額に密着し、そこから袋部 3 が立ち上がって頭髮を被うから、図 3 3 のように、袋部 3 を頬被りにすると、袋部 3 の上部先端部 3 t と、髪の毛の生え際に沿った部分 3 e に空気を含ませることができるから、家庭で髪を染める場合は、袋部 3 を頭部に被せて、カバー 1 内を密閉に近い状態に保つだけでも、内部の空気層で頭髮が保温・保湿され、毛髪温度の均一化が図られるから、染めムラや色ムラなどを防止して、失敗のない染めを行うことができる。そして、白髪染めの場合では、生え際部分を、カバー 1 の上から優しく押さえることで薬剤を弾き易い白髪に薬剤を密着させることができ、その状態を保持することができるので、染め残しが気になる生え際部分も失敗無く染めることができる。また、美容室や理容室で使用するプロ用の薬剤を使用する場合でも、薬剤に適した室温のときや、空調の風による影響がないときは、この使用方法であっても、薬剤を浸透させるに十分な環境をカバー 1 内に作り出すことができる。

10

【0046】

また、このカバー 1 は、これまでのヘアキャップのように、上から被せるのではなく、袋部 3 と垂れ部 4 とをケーブのように装着した状態から、腹部に垂らした袋部 3 又は垂れ部 4 を持ち上げて貫通孔 2 から顔を露出させるから、貫通孔 2 の周縁を薬剤の付着した頭髮に接触させずに、顔周りの肌に密着させることができる。したがって、ヘアキャップを上から被せるこれまでのやり方と比べると、薬剤の顔への付着を気にせずに装着することができるだけでなく、従来のヘアキャップのように、キャップの周縁からはみ出た髪をヘアキャップ内に入れ直す必要がないから、装着が極めて楽になる。

20

【0047】

また、カバー 1 を被装着者の上半身を被う大きさに形成している場合は、頭髮に薬剤を施すときは、汚れ防止用のケーブになり、さらに袋部 3 内に頭髮を納めて薬剤を塗布することもできるから、周囲を汚さない安全性の高いカバー 1 となる。さらに、垂れ部 4 の裾 1 a 伸ばして、テーブル上に敷くようにすれば、髪染めのときの薬剤がテーブルに垂れたりしても、それを気にせずに、薬剤を塗布することができる。そして、薬剤塗布時の被装着者の動きにも十分対応できる長さや幅を有しているから、裾 1 a がテーブル T からずれ落ちる心配もない。さらに、頭髮から垂れる薬剤は、逆三角錐の袋部 3 内に集めた後、下端部に小さな孔を開けて回収することもできるから、粘性の低いサラサラの薬剤を垂れ流す施術が可能となる。また、袋部 3 の内側に薬剤が付着していれば、それを拭き取ってから被せることになるが、袋部 3 が逆三角錐であれば、その中に束ねた垂れ部 4 を納めて空気を含ませることができるから、背中に垂らしたままの袋部 3 で簡単に頭髮全体をふんわりと包み込むことができる。

30

【0048】

<カバーの基本形態 3>

次に示す形態のカバーは、図 2 5、図 3 1 に示す基本形態 2 のカバーにおいて、前記袋部 3 と前記垂れ部 4 との境目である、被装着者の肩の稜線部分に沿って、該カバーの左右両端縁から前記貫通孔に達しないまでの切り込みが設けられていることを特徴とする。

【0049】

具体的には、図 3 4 に示すように、カバー 1 の袋部 3 と垂れ部 4 との境目に、該カバー 1 の左右両端部から貫通孔 2 に向けて切り込み 5 を入れている。この切り込み 5 位置は、カバー 1 をケーブとして装着したときに、肩の稜線に沿う箇所である。また、その切り込み深さは、左右両端縁 d から貫通孔 2 の縁に向けて、縁までの距離 D の $1/3 \sim 1/2$ 程度である。この切り込み 5 を入れることにより、カバー 1 を装着したときに、袋部 3 の左右の両端部が垂れ部 4 の左右の両端部から離れるから、垂らした袋部 3 の開口部 3 a を、図 3 5 に示すように、より大きく開かせることができる。特にカバー 1 が薄くなると、袋部 3 を垂らしたときに、袋部 3 を逆三角錐に保持させることが難しくなるが、この切り込み 5 を入れることにより、薄くて腰の弱いカバー 1 であっても、袋部 3 を逆三角錐に保持させることができる。なお、この切り込み 5 は、好ましくは、両肩に設けるのが良いが、片

40

50

方の肩に設けただけでも、同様な効果を発揮させることができる。

また、垂れ部 4 を袋部 3 と同様な逆三角錐の袋状に形成して、腹部側にも同様な袋部を垂らして薬剤を受けるようにしても良い。

【0050】

また、図 3 4 では、扁平状態の袋部 3 の開口部 3 a を円弧状に切り取っているが、必ずしも円弧にする必要はなく、肩の稜線に沿って中程まで直線的に切り込みを入れただけでも良い。また、この袋部 3 または先端部 3 0 を、図 3 6、図 3 7 に示すように、厚手のシートで形成しておけば、袋部 3 を逆三角錐に広げたときや頭部に被せるときも、袋部 3 または先端部 3 0 の腰の強さでもって、逆三角錐の形状を保持することができる。

【0051】

この形態のカバー 1 においても、使用方法は、前述のとおりであるが、特に袋部 3 を頭部に被せたときは、それが三角帽子になって型崩れし難いから、頭部でくしゃくしゃにした垂れ部 4 をより簡単に包み込むことができるとともに、頭部に被せた状態でも、背中に垂らした状態でも、袋部 3 内に空気を多く含ませることができるメリットがある。

【0052】

以上説明したカバー 1 は、何れも折り畳み可能であるから、これを箱に収納する時は、図 3 8 に示すように、折り畳んで積層した状態で箱 B a に収納する。或いは図 3 9 に示すように、帯状に連なった複数枚のカバー 1 をロール状に巻いた状態で箱 B b に収納して取り出せるようにしておく。そうすれば、図 3 8 では、ティッシュのように一枚ずつ箱 B a の開口部から取り出して使用することができる。また、図 3 9 では、ラップフィルムのように箱 B b に収納されたロールからカバー 1 を一枚分引き出しては、後続のカバー 1 との境目に形成されたミシン目 6 で切り離して使用することができる。

【発明の効果】

【0053】

本発明によれば、これまでのヘアキャップのように上から頭に被せるのではなく、ケープのように被装着者の上半身を被った状態から、腹部に垂らしたカバーを持ち上げて貫通孔から顔を露出させるので、貫通孔の周縁を薬剤の付着した頭髮に接触させずに、貫通孔の周縁をうなじから額までの顔周りに密着させることができる。しかも、その状態で、垂れていたカバーが裏返しになって頭髮に被さるから、カバーの表面に薬剤等が付着していても、それが裏返しになってカバー内に閉じ込めるから、頭髮を包み込んだカバーの外表面を常に汚れない状態に保持することができる。

【0054】

また、カバーで頭髮を包み込むときに、少なくとも腹部や背中を被うことのできる大きさのカバー部分をくしゃくしゃにしたところに、他方のカバー部分を被せて、頭髮全体を包み込む、または、一方のカバー部分を重ね合わせて、頭髮全体を包み込むから、頭髮に接するカバー部分内と、その上に被せたカバー部分との間にも空気が含まれ、その空気が断熱材となるから、従来ヘアキャップやラップフィルムと比べても、保温・保湿性に優れて、薬剤の浸透効果をより促進させることができる。

【0055】

また、頭髮に被せたカバー内の空気は、頭皮温度によって温められて、頭髮温度を均一にするから、温度差によって生じやすい染ムラや色ムラ等を無くすることができる。また、染め残しの多い生え際は、カバー 1 の上から優しく押さえることにより、薬剤が毛髪に生え際まで密着した状態で保持することができる。したがって、このカバーを使用すれば、素人であっても失敗のない毛染めを行うことができる。

【0056】

また、貫通孔に頭部を通して被れば、カバーが被装着者の腹部と背中を広く被って、頭髮に薬剤を施すときの汚れ防止用ケープとして機能させることができる。また、袋部のあるカバーでは、その袋部内に頭髮を納めて薬剤を施すことができるから、例えば薬剤が飛び散ったり、頭髮から垂れたりしても、袋部内に留めて周囲への飛散を防止することができる。さらに、頭髮から垂れる薬剤は、逆円錐形の袋部内に集めた後、下端部に小さな孔を

10

20

30

40

50

開けて回収することもできるから、頭髮に薬剤を流し掛ける等の施術も可能になる。

【0057】

また、ケーブとして装着したときのカバーの両サイドは、裃の肩衣のように広く開放されているから、被装着者自身が両腕を上げて髪を染めることができる。しかも、貫通孔に頭部が通されたカバーは、首を中心にして袋部を腹部や背中に回すことができるから、ユーザーの好み応じた使い方ができるカバーとなる。加えて、貫通孔に頭部が通されたカバーは、ずれ落ちないから、周囲を汚さずに、一人で髪を染めることができる家庭用のカバーとなる。

【0058】

また、このカバーは、引っ張れば伸びる薄い合成樹脂製シートで形成され、特に頭部よりも小さな貫通孔から顔を露出させることによって、貫通孔の周縁を被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着させるから、頭髮に施した薬剤から水分が垂れてきても、それを顔やうなじに漏出させない効果がある。しかも、伸びた貫通孔の周縁は、不快感を覚えるような強いものではないから、違和感なく長時間放置することができる。

【0059】

さらに、このカバーは、折り畳んだ状態では、扁平な略長方形になるから、帯状のフィルムから安価に量産でき、使い捨てもできるから、今までのヘアキャップのように、洗浄する必要がない。したがって、美容室・理容室にとっては、作業性の改善となり、お客様にとっても衛生的で気持ちのよいカバーとなる。

【0060】

加えて、顔周りに密着した貫通孔は、適度なテンションと幅とでもって肌に密着するから、着ていたTシャツを脱いでも、カバーと一緒に外れることはない。したがって、前開きの服に着替えるのを忘れて髪染めを始めても、慌てることなく作業を進めることができる。

【0061】

さらに、腹部へ垂れるカバーの裾を長く伸ばせば、ケーブとして装着したときに、長く伸びた裾をテーブルに敷くことができるから、カバーで腹部を被うだけでなく、テーブルの汚れ防止用シートとしても機能させることができる。

【図面の簡単な説明】

【0062】

【図1】本発明に係るカバーの平面図。

【図2】本発明に係る他の形態のカバーの平面図。

【図3】本発明に係るさらに他の形態のカバーの平面図。

【図4】図3のカバーの裾をテーブル上に敷く場合の説明図。

【図5】図1のカバーの貫通孔に頭部を通して被った状態の図面代用写真。

【図6】貫通孔から顔を露出させる様子の図面代用写真。

【図7】貫通孔から顔をさらに露出させる様子の図面代用写真。

【図8】貫通孔から顔を露出させた状態の図面代用写真。

【図9】貫通孔の周縁が顔周りに密着した状態を示す図面代用写真。

【図10】他の形態の貫通孔を備えたカバーの平面図。

【図11】貫通孔を開閉式にした平面図。

【図12】垂れ部の上に被せた袋部の端をクリップで止めた図面代用写真。

【図13】背中に垂らした頭髮を図1のカバーで挟んだ状態の図面代用写真。

【図14】図13の状態のカバーを中央に折り重ねた状態の図面代用写真。

【図15】図14のカバーの下端部を頭頂部に持ち上げた状態の図面代用写真。

【図16】図14のカバーの下端部を持ち上げて頬冠した状態の図面代用写真。

【図17】図16の頬冠した左右両端部を顎下で結んだ状態の図面代用写真。

【図18】図14のカバーを肩まで持ち上げて肩掛のようにした図面代用写真。

【図19】図25のカバーの垂れ部を腹部へ垂らした状態の図面代用写真。

【図20】図25のカバーの袋部を背中へ垂らした状態の図面代用写真。

10

20

30

40

50

- 【図 2 1】図 1 9 の垂れ部を持ち上げて貫通孔から顔を露出させた図面代用写真。
 【図 2 2】図 1 9 の垂れ部を頭部に被せた状態の図面代用写真。
 【図 2 3】図 2 1 の貫通孔が顔周りに密着した状態の図面代用写真。
 【図 2 4】図 2 3 の袋部を頭部の垂れ部の上に被せた状態の図面代用写真。
 【図 2 5】図 1 9、図 2 0 のカバーの平面図。
 【図 2 6】頭部の垂れ部の上に腹部から持ち上げた袋部を被せる様子の図面代用写真。
 【図 2 7】頭部の垂れ部を腹部から持ち上げた袋部で被った状態の図面代用写真。
 【図 2 8】図 2 5 のカバーで頭髪を包むときの他の包み方の説明図。
 【図 2 9】図 2 8 のカバーの左右上縁部を閉じた捻じった状態の図面代用写真。
 【図 3 0】図 2 9 の捻じった先端部をクリップで止めた状態の図面代用写真。
 【図 3 1】図 3 0 のクリップに代えて、垂れ部に止め部を設けたカバーの平面図。
 【図 3 2】腹部へ垂らした袋部を持ち上げて頭髪に被せた状態の図面代用写真。
 【図 3 3】図 3 2 の袋部の両端を顎下で結んだ状態の図面代用写真。
 【図 3 4】図 2 5 のカバーに切り込みを設けたカバーの平面図。
 【図 3 5】図 3 4 のカバーを装着した状態の図面代用写真。
 【図 3 6】図 3 4 の袋部の一部を厚くした形態の平面図。
 【図 3 7】図 3 6 のカバーを装着したときのカバーの形態を示す外観斜視図。
 【図 3 8】本発明に係るカバーを折り畳み、それを積層して箱詰めにした説明図。
 【図 3 9】ロール状に巻かれた本発明に係るカバーを箱から取り出すときの説明図。
 【図 4 0】袋部 3 から紐 9 を取り出して、その袋部 3 を固定する様子の図面代用写真。
 【発明を実施するための形態】

10

20

以下、本発明のカバーの実施形態を図面と図面代用写真とに基づいて説明する。なお、以下の説明では、これまで説明しなかった点に重点をおいて説明する。

【0064】

カバー 1 は、種々の形状を取り得るが、貫通孔 2 は、被装着者の頭部が辛うじて入る大きさであり、そこに頭部を入れて被った状態から、カバー 1 の前側を引き上げながら貫通孔 2 から顔を露出させると、貫通孔 2 の周縁がさらに伸びて、被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着する形状でなければならない。このような、伸展性のある薄いシートとしては、ポリエチレンやポリプロピレン等から成形されたポリ袋がある。そこで、このポリ袋を使って、どの程度の伸びがあれば、適度な強さで顔周りに密着するかを、種々の厚さのポリ袋でもって実験した。

30

【0065】

実験に際しては、厚さが 0.008 mm、0.015 mm、0.025 mm、0.03 mm の透明なポリ袋と半透明なポリ袋を購入し、それぞれに円周 38 cm の貫通孔を形成した。この貫通孔を被装着者の頭部に通すときの頭（頭髪を含む）サイズは、53 cm、貫通孔から顔を露出させて、うなじから耳の下を通して額に至る顔周りに沿わせるときの円周長さは、56 cm である。その条件で、円周 38 cm の貫通孔に頭部を通し、続いてその貫通孔から顔を露出させる実験を行った。その結果を表 1 に示す。

【0066】

40

【表 1】

シートの厚さ (単位 mm)	透明シート	半透明シート
0.008	締め付け力は弱い	締め付け力は、透明シートより強い
0.015	締め付け力はやや弱い、締め付け感はない	締め付け力は、透明シートより強い、締め付け感はない
0.025	締め付け力が程良く、気にせず装着できる	締め付け力は、少し強い、慣れれば気にせず装着できる
0.030	締め付け力が強く、慣れれば気にせず装着できる	締め付け力が強く、貫通孔の円周を 40 cm に広げると、程よい強さとなる

【0067】

50

この実験から、ポリ袋で作ったカバー1は、透明シートの方が半透明シートより良く伸びて、密着性に優れているが、半透明シートは、腰が強く、それをくしゃくしゃにすると内部に空気層が形成されるから、保温性に優れていると言える。したがって、室温が低くて保温性を高めたいときは、半透明シートが好ましく、室温が高くて保温性を重要視しないときは、透明シートの方が好ましい。また、厚さが0.04ミリメートル以上のシートになると、貫通孔2から顔を露出させるときに、かなりの抵抗を感じるから、厚手のシートを使用するときは、頭部サイズに合わせて貫通孔2を大きくしておく必要がある。

なお、ここで使用したポリ袋は、一例であって、例えば柔軟性、ゴム弾性に優れたEVA樹脂（エチレンビニールアセタートコポリマー）やそれを添加したポリエチレンシート等でも良いが、これらは、厚みや伸びも異なるから、それらの中から適宜なものを選択すればよい。

10

【0068】

また、この特性を利用して、厚みの異なるカバー1を2枚使う方法もある。例えば厚みが0.008ミリメートルの透明のカバー1と、0.025ミリメートルの半透明のカバー1とを用意し、前者の薄手のカバー1は、図1に示す形状のカバー1とし、後者の厚手のカバー1は、図25、図31または、図34、図36に示す形状のカバー1としておく。そして、厚手のカバー1の貫通孔2に頭部を通してから、その上から薄手のカバー1の貫通孔2に頭部を通して二枚重ねとする。その状態で頭髮に薬剤を施した後、まず薄手のカバー1の貫通孔2から顔を露出させ、続いて厚手のカバー1の貫通孔2から顔を露出させると、顔周りには、カバー1の貫通孔2が二重に沿う状態となる。その状態で薄手のカバー1をくしゃくしゃにして頭部に被せ、その上からさらに厚手のカバー1を被せるとカバー1内をより一層、保温・保湿することができるとともに、厚手のカバー1を被せるから、頭髮を包み込み易い、断熱性の高いカバー1になる。

20

【0069】

また、カバー1の貫通孔2をどの位置に設けるかによって、ケーブとしたときに、様々な使い方ができる。例えば垂れ部4よりも、袋部3の方を長くすると、図20に示すように、ロングヘアーを袋部3内に収納して薬剤を塗布することができるから、ロングヘアー用のケーブとして使用することができる。また、個人が自宅で髪染めを行うときは、鏡を見ながら前屈みになって薬剤を施すことが多いから、短めの袋部3を腹部に垂らし、長めの垂れ部4を背中に垂らす形態を採ることもできる。

30

【0070】

また、図25において、袋部3を被装着者の頭部に被せたときの被装着者の額と接する縁部aに沿って、左右方向に部分的に分離可能な紐9を形成しておけば、その紐9でもって、頭部に被せた袋部3を固定することができる。

【0071】

ここで、部分的に分離可能とは、紐9の付け根9aが袋部3と一体となり、それ以外の部分は、袋部3から適宜に分離可能なものをいう。具体的には、図25に示すように、予め袋部3の縁部aに沿ってミシン目9bで切り込みを入れておき、そのミシン目9bで切り離して紐9を形成した後、その紐9の中央部分のミシン目9cを左右に分離すれば、袋部3の前縁両サイドから左右方向に紐9が取り出せるようにしたものである。

40

【0072】

この紐9で袋部3を頭部に固定するときは、例えば、図40に示すように、袋部3から取り出した左右の紐9をうなじ付近で結んだり、顎下で結んだりする。そうすれば、頭髮に被せた袋部2を固定することができる。また、背中に垂らした袋部3を持ち上げるときに、左右の紐9を持って引き上げれば、高齢者であっても、一人で袋部2を頭部に被せることができる。図40では、額にピンがあるが、これは不要となる。

【0073】

また、美容師や理容師が使用する場合は、お客様にクロスや汚れ防止用のケーブを装着した上からカバー1を装着するので、カバー1をケーブとして使用する必要性は少ない。また、施術内容によっては、頭髮にパーマロットやストレートパーマ用の撥水紙等を装着

50

したり、ウィービングのホイール等を装着したりする。ときには、頭髪を自然に垂らしたままにする。また、薬剤を施した後は、時間差法や施術の修正、湿熱促進器や乾熱促進器を使用する等、多種多様な施術を施す関係から、袋部3と垂れ部4とで、頭髪に装着された種々の器具（パーマロット等）を包み込むことができる大きさが好ましい。したがって、カバー1を商品化するときは、頭髪の長さや目的に応じて、貫通孔2の位置や形状、袋部と垂れ部の組み合わせやその形状、カバー1のサイズや厚み等が異なるものを複数用意しておくのが好ましい。

【0074】

美容室や理容室では、薬剤を頭髪に施す時や、薬剤を施した頭髪をコーミングする時に薬剤が垂れたり飛散したりしても、背中側に垂らした逆三角錐の袋部3が薬剤を受け止めて、周囲に付着する事故を防ぐことができる。また、袋部3は、柔軟に変形するので、施術者の立ち位置や、施術内容に応じて、袋部3を種々の形状に変えて作業性を向上させることができる。

10

【0075】

これまでの汚れ防止用ケープは、お客様への薬剤付着は防いでも、薬剤がケープや施術者自身に付着すると、それによる二次汚染を防ぐことができなかった。例えば施術者は、お客様の回りを動きながら薬剤を施していくので、施術中に薬剤が付着したケープや頭髪に接触して、自身に付着した薬剤に気づかずに施術を続けることがある。こうした場合、施術者自身に付着した薬剤が、お客様や周囲に付着して思わぬ事故を招くことがあった。

【0076】

20

また、背中に垂らした袋部3内で液状の薬剤を頭髪に流し掛ける場合、頭髪から垂れる薬剤は、逆三角錐の袋部3の下端部に集めることができるから、その先端部をカットし、その先にボウルで受けることによって回収することができる。また、薬剤を施した後は、カットした先端部を折り曲げて、テープやクリップ等で密閉することにより、孔が塞がれた袋部3として使用することができる。

【0077】

これまでのパーマでは、頭髪に流しかけるパーマ剤を受けるために、U字状のボウルを使用していた。このボウルは、左右の耳下からうなじにかけて密着するようなU字状の容器であり、それをお客様の両肩に掛けて垂れるパーマ液を受け、その後、ヘアキャップやラップフィルムで頭髪を被ったりしていたが、このカバー1を使用すれば、U字状のボウルが不要になり、そのボウルの脱着の手間が不要となる。そして、施術中の用具の使い分けも不要となるから、施術時間が短縮され、お客様だけでなく、施術者の負担も軽減される。

30

【0078】

また、美容室や理容室では、汚れ防止用として、後開きのマントのようなクロスでお客様を被うが、お客様が動いたり、前屈みになったりすると、背中で重ね合わされたクロスが開き、それによって、クロスに付着した薬剤が衣服等に付着することがあったが、このカバー1を使用すれば、そうした事故を防ぐことができる。

【0079】

さらに、貫通孔2の周縁が、顔周りに密着しているから、カバー1で頭髪を包み込んだまま、着ていた前開きでは無いTシャツ等を脱いでも、カバー1と一緒に取れることはない。そして、風呂場で、シャンプーをするときに、カバー1の頭頂部を掴んで上方へ引っ張れば、貫通孔2が頭部からずりりと抜けて外れるから、カバー1内の薬剤が、手や周囲に付着することも無く、それを取り外した後も、カバー1を丸めることにより、薬剤の漏出を防ぐことができるから、施術後の薬剤付着による事故を防ぐことができる。

40

【0080】

また、美容室や理容室などでは、お客様をシャンプー台へ案内し、シャンプーできる体勢になってから、カバー1を止めていたクリップやピン等を取り除いて、カバー1を水平に引っ張れば、カバー1をシャンプーボウル内で取り外すことができるから、周囲を汚す危険性はない。また、頭髪にパーマロットや撥水紙などを装着している場合は、カバー1

50

を外す前に、袋部 3 と垂れ部 4 をシャンプーボウル内で開放して、パーマロット等を取り去ってから、カバー 1 を取り外せば良い。

これにより、シャンプー台へ移動する時や、それを取り外す時の薬剤付着事故を防ぐことができる。それに加え、お客様のうなじを支えるシャンプーボウルの首のせ台に薬剤を付着させないから、従来のような、うなじ付近への薬剤の再付着による髪の逆折れを無くしたり、シャンプー時間を短縮したりすることができる。

【符号の説明】

【0081】

- 1 カバー
- 2 貫通孔
- 3 袋部
- 4 垂れ部
- 5 切り込み
- 6 ミシン目
- 8 止め部
- 9 紐

10

【要約】 (修正有)

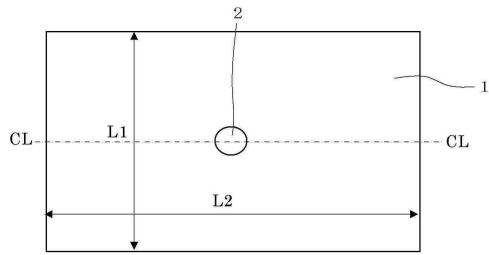
【課題】ヘアカラー剤やトリートメント剤等の薬剤を施すときは、ケープとなり、薬剤を施した後は、薬剤の付着した頭髪を簡単に包み込むことができる新たなカバーと、その使用方法を提供する。

20

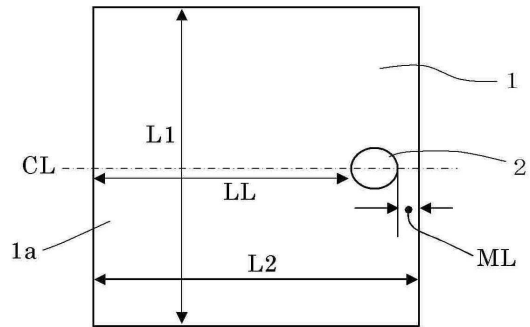
【解決手段】略中央部分の貫通孔 2 に被装着者の頭部を入れて被ると、被装着者の腹部と背中を被う大きさとなる伸展性のある合成樹脂製シートで形成されている。前記貫通孔は、伸びながら被装着者の頭部が辛うじて入る大きさに形成され、さらに前記貫通孔の周縁を被装着者の首周りに配置した状態から、腹部へ垂れるカバー 1 部分を前方へ持ち上げて前記貫通孔から被装着者の顔を露出させると、前記貫通孔の周縁が、さらに伸びて被装着者のうなじから耳の下を通して額に至る顔周りに密着する形状である。

【選択図】図 2 5

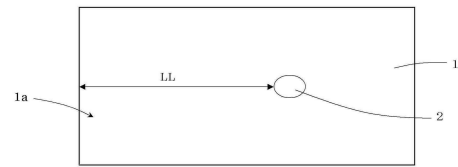
【図 1】



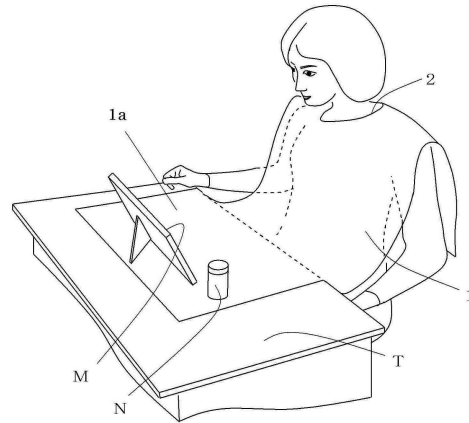
【図 2】



【図 3】



【図 4】



【図 5】



【図 6】



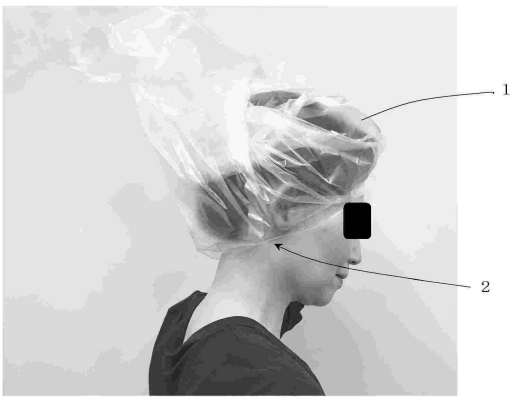
【図 7】



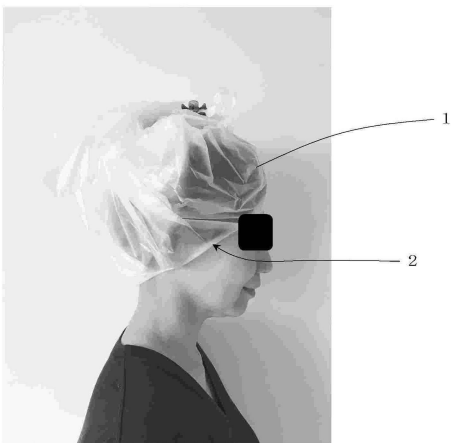
【図 8】



【図 9】



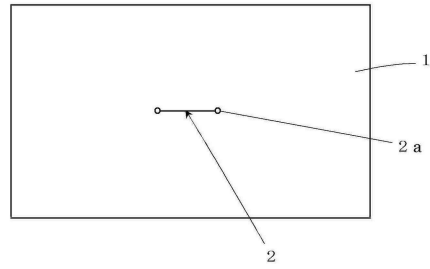
【図 12】



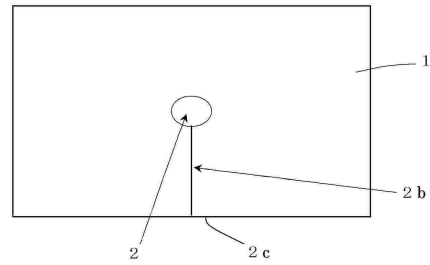
【図 13】



【図 10】



【図 11】



【図 14】



【図 15】



【図 16】



【図 17】



【図 18】



【図 19】



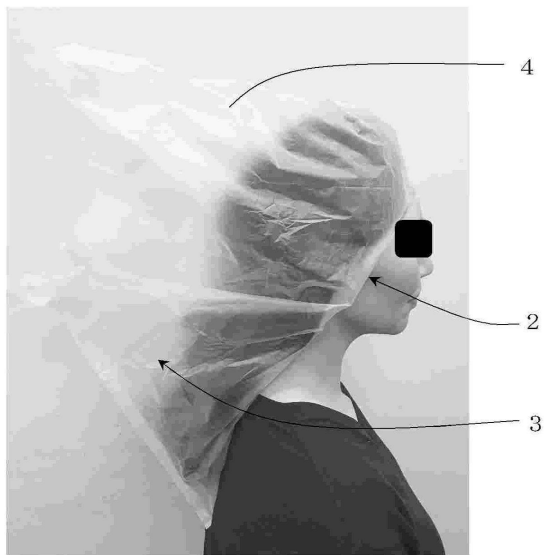
【図 21】



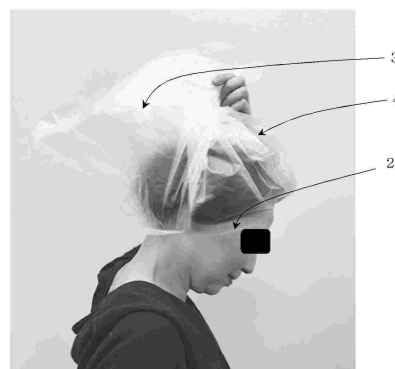
【図 20】



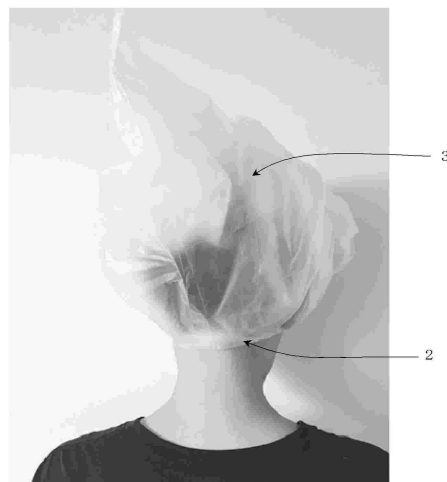
【図 22】



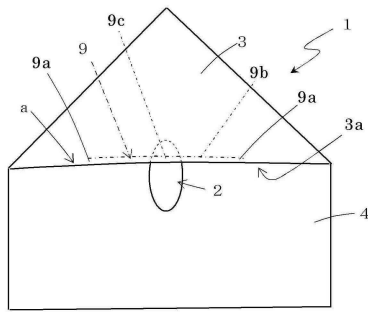
【図 23】



【図 24】



【図 25】



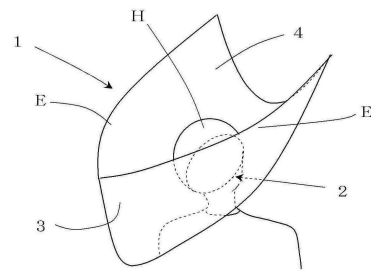
【図 26】



【図 27】



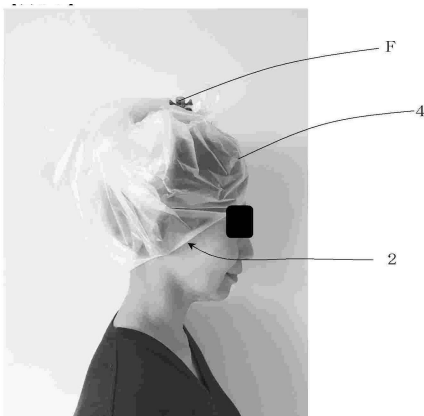
【図 28】



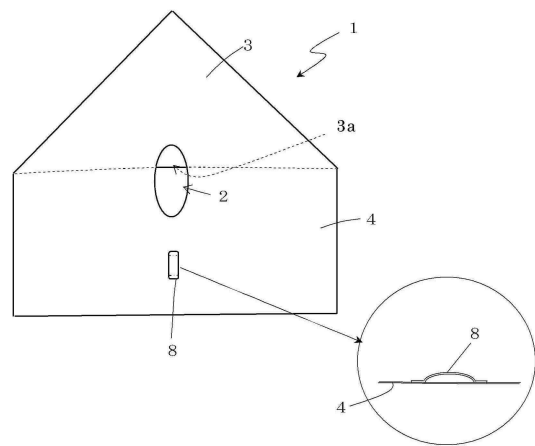
【図 29】



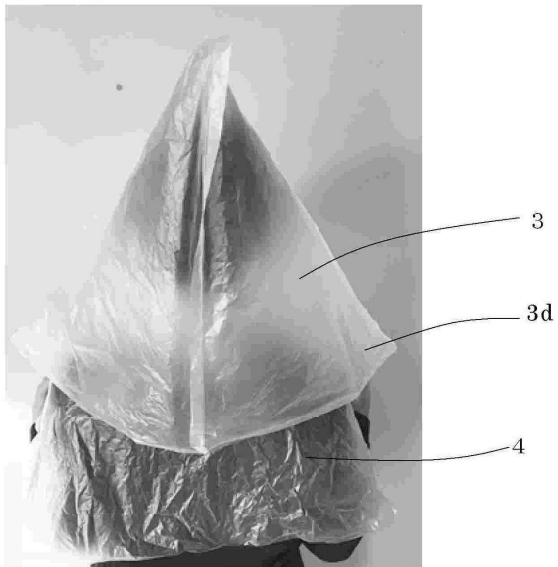
【図 30】



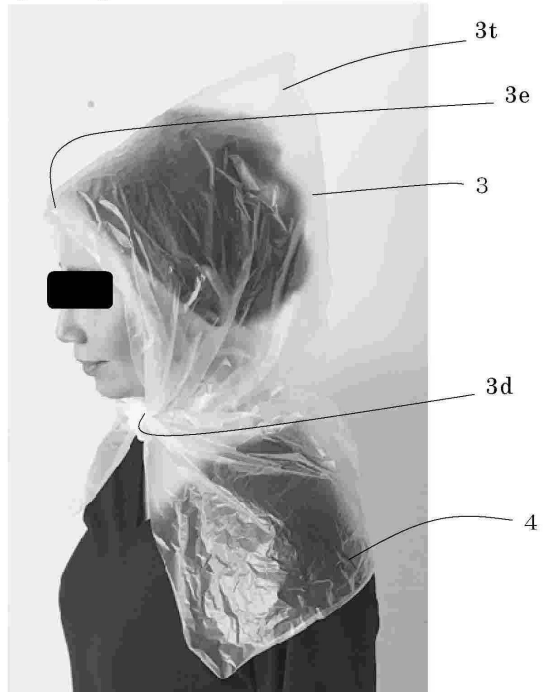
【図 31】



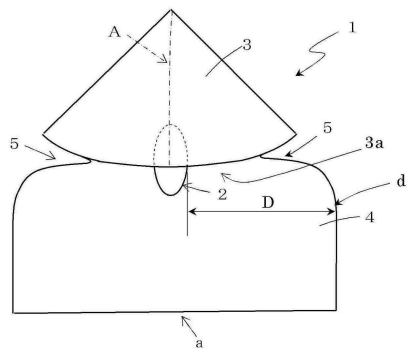
【図 3 2】



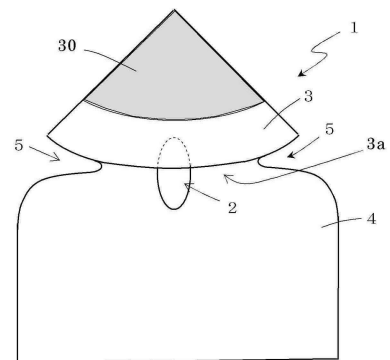
【図 3 3】



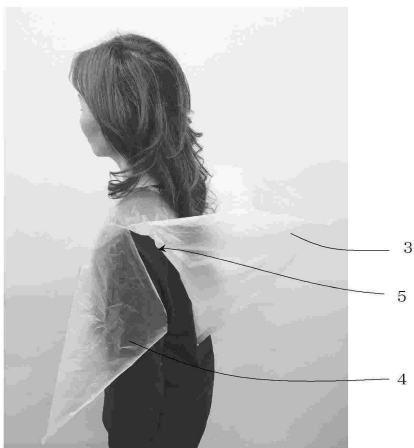
【図 3 4】



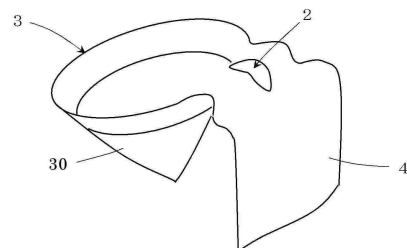
【図 3 6】



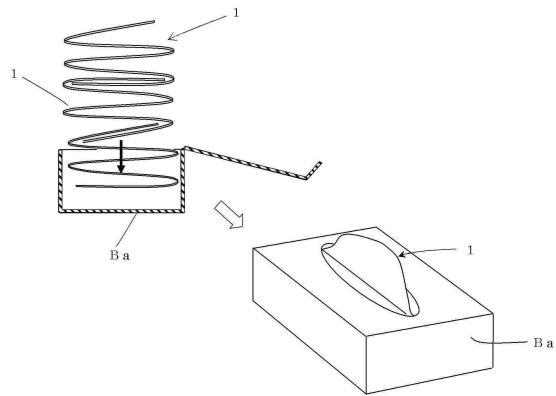
【図 3 5】



【図 3 7】



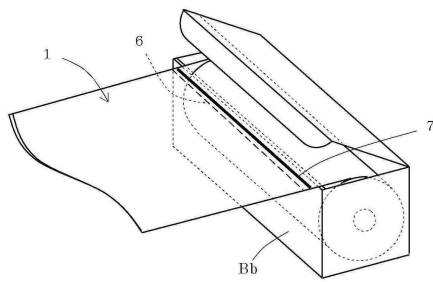
【図 38】



【図 40】



【図 39】



フロントページの続き

(58)調査した分野(Int.Cl., DB名)

A 4 5 D 1 9 / 0 0 - 2 0 / 5 2